2Fa-4

ジェンダーに関する学習への小学校教師の意識

○余語宗紀*　諏訪きぬ**　石岡富貴子***
（*鳥取大・院　**明星大　***鳥取大）

＜目的＞ジェンダーに関する小学校教育をよりよいものとするため、学習に対する教師の意識と現状を明らかにし、課題点を明確にすることを目的とする。

＜方法＞1998年10月、鳥取県内東部19校の全学年教師を対象としてアンケート調査をおこなった。有効回答数は230名であった。

＜結果＞現在「男女の性に拘わらず自立した生活能力を身につけさせる」ことは力を入れて行われているが、それに比べて「女らしく・男らしくということは性別役割分業に基づく考え方であることを理解させる」「人間の性に身体的性（ｾｯｸｽ）と社会・文化的性（ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ）の側面があることを理解させる」ことは 行われ方が良くないようであった。また、家事に関する学習において性にとらわれないようにすることには留意されているものの、将来の家事分担と関連させて考えさせることには力が入れられていないようである。学習内容ごとの最適時期は、「進んで手伝いをする」ことや「男女で差別しない」ことは入学前から、「家事の意味と重要性を理解する」ことは低・中学年から、「性別役割分業の見直し」「将来の家事分担を考える」「社会での性差別を考える」ことは高学年から行われるのが妥当だと考えられていた。日常生活では、係り活動を性によって向き不向きと区別することや、男子が先・女子が後の名簿を使用することはほとんど行われていないが、体育や運動会では男女別で走ったり、並ぶときに男女で別々の列を作らせたりなど、男女による区別は日常的によく行われていることが明らかになった。